資料紹介

豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争を描く二種の新出図像資料

――「東征図」と『朝鮮日本図説』――

鄭　潔　西
ZHENG Jiexi

1592年に勃発した豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争（文禄・慶長の役、1592～1598）が、明の軍事・政治介入によって明・日・朝三国間の「国際事件」となったのは、既に周知のことである。この戦争に関して、当時の多数の資料が後世に残っている。ところが、それら資料は、主に王朝の実録、公私の文書、個人の文集や日記などの文字資料に限られている。戦争関係のより写実的な図像資料は、それら文字資料と比べれば、極めて希少である。

それらの中では、日本側と韓国側の図像資料がほとんどである。[(1)] 特に「朝鮮軍陣図屏風」（日本国製作、鍋島報効会所蔵）・「朝鮮蔚山合戦之図」（日本国製作、前田育徳会尊経閣文庫所蔵）・「釜山鎮・東萊府殉節図」（朝鮮国製作、韓国陸軍博物館所蔵）・「壬辰倭乱図屏風」（朝鮮国製作、日本の和歌山県立博物館所蔵）などが有名である。中国側の図像資料で、これまで紹介されたのは、「征倭紀功図巻」[(2)] の一種しかない。

本稿は、秀吉の朝鮮侵略に関する二種の中国側の新出図像資料を紹介するものである。

「東征図」

「東征図」は、1597～1598年の戦役期に明軍の西路・海路軍の監軍（明朝廷より朝鮮に派遣された監視官）である王士琦の功績をたたえるために作られた絵巻である。

「東征図」の絵巻の原本は現存せず、その題録（原図の余白部分で絵巻の内容を紹介する説明文）は浙江省仙居県にある王士琦一族の家譜『章安王氏宗譜』巻2の「藝文・題東征図始終全録」に収録され、図の内容はそこからほぼ窺える。[(3)] 題録の項目は20箇所もあり、その詳細は次のようである。

①「渝州拝命　先生由渝州守轉拜觀察、逾年即奉簡命以參知監督土漢官兵禦倭朝鮮、蓋異數也。」

王士琦が四川で勅命を受け少数民族を主体とする四川の地方軍を率いて朝鮮へ旅立った。

②「萬里督師　所部兵皆土司諸苗、性頑獷不可馴、先生以恩威鼓舞操縱、無不悅服、歷蜀楚梁齊燕薊遼沈、重繭萬里、經年昉至、無敢亂行而嘩、僉謂紀律嚴明、千古所僅見也。」

地方軍を率いた王士琦が万里の山川を跋渉してようやく朝鮮の国境に到着した。

③「鴨江系節　鴨綠為朝鮮遼左之界渡、此者、僉謂強寇無殄滅之期、孤征多離索之感、先生獨擊檝嘯歌、誓捐七尺。是日也、和風霽色、江波先熨、識者已占賊之不足平矣。」

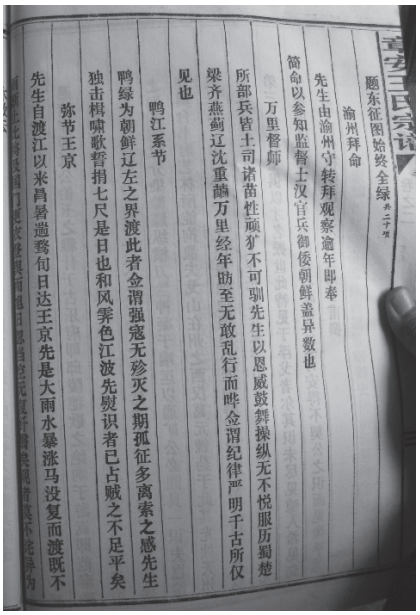
題東征图始終全録
渝州拜命
先生由渝州守转拜观察逾年即奉
簡命以参知监督土汉官兵御倭朝鮮蓋异數也
万里督师
所部兵皆土司诸苗性顽犷不可馴先生以恩威鼓舞操纵无不悦服历蜀楚
梁齐燕薊辽沈重繭万里经年昉至无敢乱行而哗金謂紀律严明千古所仅
見也
鴨江系节
鴨绿为朝鮮辽左之界渡此者金謂强寇无殄灭之期孤征多离索之感先生
独击楫啸歌誓捐七尺是日也和风霁色江波先熨识者已占贼之不足平矣
弥节王京
先生自渡江以来昌暑遄骛旬日达王京先是大雨水暴涨马没复而渡既不

図1　題東征図始終全録（部分）

王士琦が鴨緑江を渡って朝鮮に入境しようとした。

④「彌節王京　先生自渡江以來、冒暑遄騖、旬日達王京。先是、大雨暴漲、馬沒腹而渡、既不雨、漸止、比將及國門、更衣登輿、而旭日忽當空、無复纖翳矣。觀者莫不詫異、為休徵云。」

王士琦が王京（現在のソウル）に到着しようとした際、連日の大雨が急に止んだ。

⑤「全州誓師　全州為西路要地、先生税駕王京數日即攬轡西行、集諸將士誓共滅賊、無不零涕超距者、成功固其所也。」

王士琦が王京より南下し全州で軍を集めて決戦を誓った。

⑥「攬轡軍營　先生彌節南原、逾全州已數百里、忽朝鮮健兒屬櫜鞬馳一紙飛騎而至、視之、則朝鮮都元帥所遣偵者述中路泗川敗状也。泗川與南原密邇、鮮民聞之、争逃匿、勢如崩波。俄頃、城中閒無人矣。随衛諸材官環跪而泣、謂全州不居、何為自困此空城、蹈楊元屠城覆轍也。先生曰、倭能至南原、獨不能至全州耶。且大軍方與賊對壘、而監軍使者無故先遁、萬一訛傳而師潰、誰任其咎。吾今惟有誓死報國耳。有異議者、立斬以徇。即夕傳令詰朝大張旗鼓、攬轡前進、軍營洶洶遂定、而麗民之逃者漸歸矣。此實成敗一大關頭、僉謂先生卓識大勇、古今罕儷、卒能成此不世之功云。」

南原で前方の大敗の報に接しても、王士琦が困難な局面に勇敢に立ち向かって進軍すると決意した。

⑦「部署舟師　舟師初止三千、後調集者次第至。先生一一指授方略、申嚴紀律、將士無不感奮、遄收奇捷、非嘗試也。」

王士琦が船師（水軍）の軍紀を厳粛にし作戦の方策を定めた。

⑧「栗林制勝　行酋結營、自海噬至民橋數十里而來、栗林則叢菁蔽目、咫尺不辨、外多崇崗、賊更番偵瞭我兵、每一騎及順天、轍先見之、不能飛越也。先生與劉冠軍密計誘行酋出、以兵襲之、擒戰百餘、焚栗林、奪民橋、直逼其巣、而賊之樵汲皆窘、勝算在我矣。」

王士琦が奇襲をもって栗林で小西行長軍を破り、日本の西路軍を窮地に追い込んだ。

⑨「文武定計　賊壘堅甚、而鳥鎗尤利。水陸夾攻、雖屢以捷聞、而我師傷者亦衆、先生與二帥密議、用間賺其出而後擒之、雖行酋幸未膏斧鉞、然隳城焚艦、若持左券以索、亦奇矣。」

王士琦が西路軍の総大将劉綎と海路軍の総大将陳璘と軍議し、日本の西路軍を殲滅する方策を定めた。

⑩「攻破堅城　行酋之巣、石城五重、木城三重、每城皆樹敵樓、濬壕塹、負山襟海、雖有攻具、不能施也。比先生之計售、而諸倭遂無固志、一鼓復隍、蓋智力兼褫其魄也。」

「堅城」とは小西行長が築いた堅固な順天城である。明軍が王士琦の方策の指導のもとで順天城を陥落させた。すなわち「順天城の戦い」である。

⑪「焚舟奇捷　我師水陸攻賊、猶懼竊寇以死拒也。先生與二帥計、姑令水兵少徹一面以誘之、我舟將及南海、而石曼諸酋率援師千艘適集、副総兵鄧子龍死之、我兵奮臂殊死戰、更用火攻、賊遂大潰、追奔一晝夜、馘石曼、俘正成、賊舟幾盡、説者以為赤壁鏖兵不是過也。」

王士琦が劉綎と陳璘と協議し、海上戦の方略を定めた。結局、海上で明軍が大勝利を収めた。すなわち「露梁の海戦」である。

⑫「南海蕩平　先生見賊巣堅峻、欲先取南海以扼其吭、密授計鮮之議政李德馨以蠟書、因招故南海守李文彧、通事金雲鶴、約南海倭將平義智所親信鄭六同臨機內應、部署已周、舟師佯撤、而適值石曼之救、捷方收、二巣並下、易若取攜、孰謂非握中妙算也。」

王士琦の方略によって南海島の倭城をも容易に攻め取った。すなわち「南海の戦い」である。

⑬「搜剿逋夷　醜夷既為水陸所殄、游魂假息多遁入叢菁窮谷間、以伺竊發、先生二帥協謀多方、剿獮閒山之澤之間、無復鰍鰋之族、揚耆而濡沫者、真旗常之伐哉。」

山林に逋脱した日本軍の残兵を捜査し悉く消滅させた。

⑭「奏凱班師　四師分道並進、而惟西路首功最多、至於露梁一戰、天昏海赤、京觀之封將成熊耳凱旋、殊勳未有盛於此挙者也。」

戦勝後明軍が凱旋式を行った。王士琦が監視した西路軍が一番の手柄を立てた。

⑮「壺漿喜迓　先生監視六師、申令明肅、秋毫無敢犯者、且成此奇功、屬國再造、旆旌所屆、士女老幼爭

以壺漿勞師、歡呼加額、引裾随行、此等景象、即班定遠未必多讓也。」

朝鮮の民衆は食べ物・飲み物を用意し王士琦が監視した明軍の凱旋を歓迎した。

⑯「國君迎宴　國君在播遷之餘、薪膽不能自振、初聞先生膽略號令、已切怙依、比捷書至、而感可知也。問候之使接踵於途、復躬走數十里、迎宴江滸、称觴獻頌、情文迥異常貫、蓋先有以得其心矣。」

朝鮮の国王は王士琦に対して感激の極みに達し宴席を設け彼を招待した。

⑰「水陸驗功　振旅王京、督撫指部使者監師大帥偏裨文武之吏百餘人、集演武場、紀功次俘而縶者大酋、而亟首者、臨陣而馘者、水陸功次以二千計、髑髏縱廣數畝、器甲称是、不啻若岡陵峙也、萬衆咸嘖嘖謂自有倭患來、所未睹記云。」

演武場で明軍の全軍が集められ戦功が公示された。

⑱「太平飲至　主上聞捷音、天顔有喜、捐帑金十萬犒諸文武將士制府、因蠲吉設宴、揚識王恩、屆期畢集、焚香面闕拜而即席卜夜酣飲而罷、雨雪之嘆、獨殄宸衷、湛露之歡、遥沾屬國、實昭代奇勳、而千古盛事也。」

万暦帝が吉報に接し大喜びし、労いの金銀を下賜し全軍を宴した。

⑲「屬國遮留　先生既奉肰功召還、振旅僕夫在路矣、屬國君臣把袂而趑趄、士庶臥轅而流涕、若有不容一日捨先生而去者、此豈可以聲音笑貌襲取而得哉。」

王士琦が帰国の際、朝鮮の民衆がその功績をたたえ彼を引き止めようとした。

⑳「勒碑遺愛　全羅之民感先生輯寧綏靜之恩、在所勒石頌德、先生過全州見之、嘆曰、吾以奉拯外藩、豈市私恩而博名高哉、命左右畀而置之、諸父老號哭遮道、得請乃已。自全州達王京、蓋所在唐厓而萬喙爭述、即先生亦不勝禁止矣。猗歟盛哉。」

王士琦は帰国の途中、朝鮮から自分の功績や徳をたたえる紀功碑を見てそれに感嘆した。

以上の20項目の題録から分かるように、「東征図」は20箇所の場面より構成される厖大な絵巻である。題録にみる順天城の戦い、露梁の海戦、そして南海の戦いの様子は、「征倭紀功図巻」の描写と一致するところが少なからずある。例えば、題録の第⑩項目の「攻破堅城」に小西行長の順天城について「行酋之巣、石城五重、木城三重、每城皆樹敵樓、濬壕塹、負山襟海、雖有攻具、不能施也」という描写がある。ここにみる順天城の五重の曲輪と、城の背後の山、そして城の前面の海は、「征倭紀功図巻」の描かれた内容と全く一緒である。「東征図」の写実性はここから窺える。

また、「征倭紀功図巻」に軍議の図がある。図の焦点となったのは、座席に座る一人の高官の姿である。この高官は、烏紗帽（文官の被り物）を被っており、これまでは海路軍の総大将陳璘と推定されている。[(4)] と

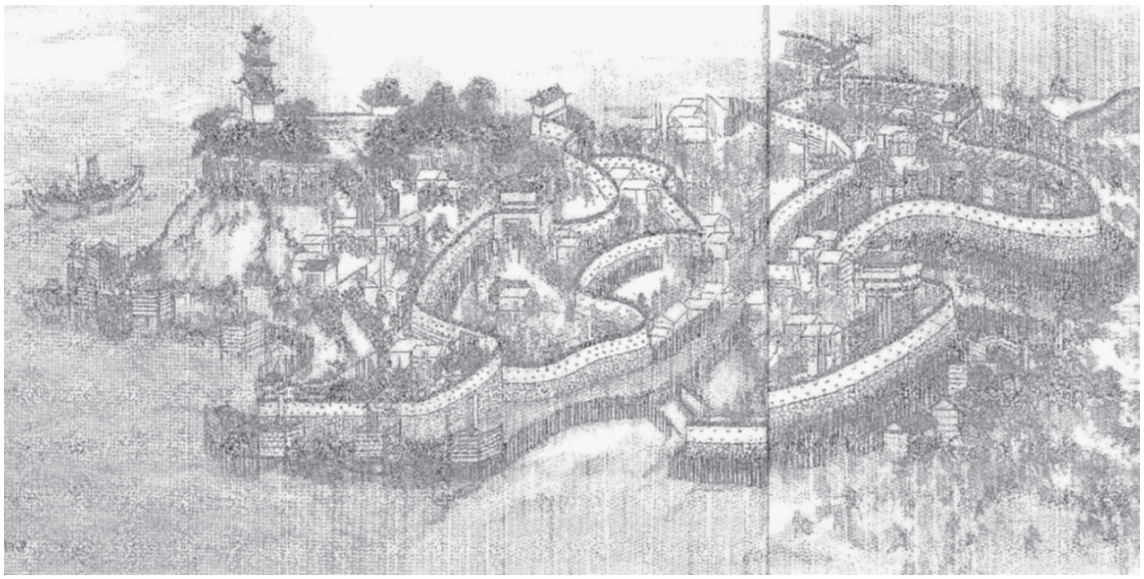

図２「征倭紀功図巻」にみる「順天倭城全図」（中村仁美氏模写、『倭城の研究』第４号、４～５頁より）

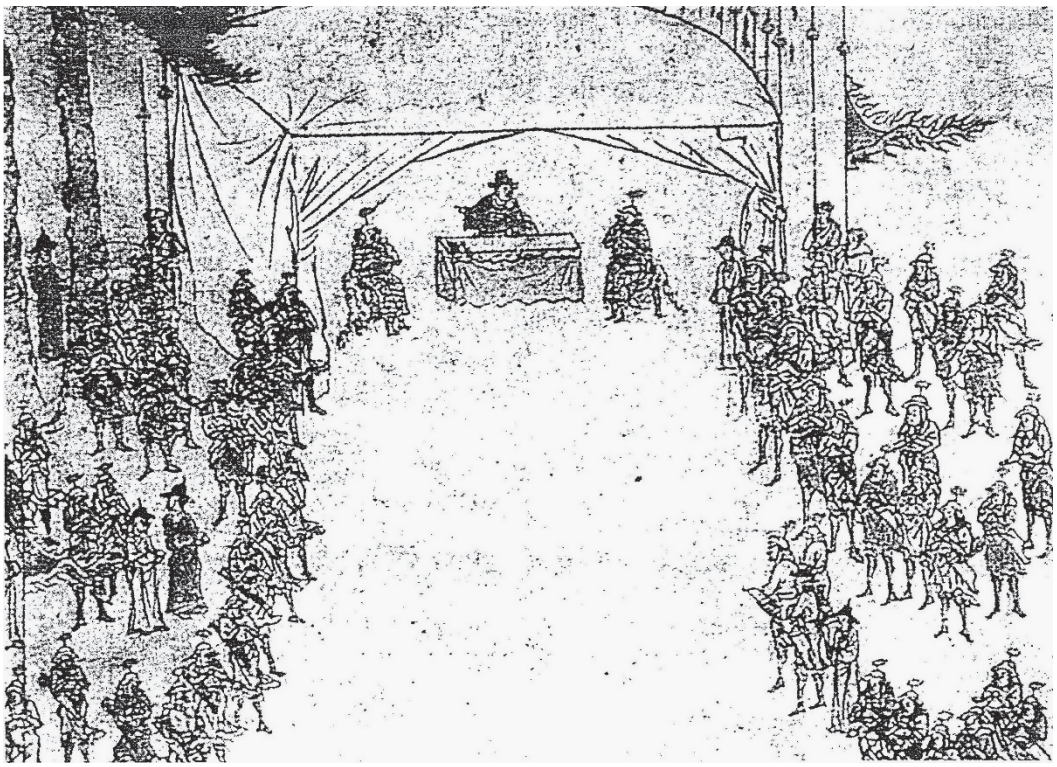

図３ 「征倭紀功図巻」にみる「軍議図」（陳邦植『陳璘明水軍都督의征倭紀功図再照明』、19 頁より）

ころが、陳璘は武将であるため、文官の烏紗帽の装飾はやや不思議である。「東征図」の題録を調べたところ、その第⑨項目の「文武定計」にも同じような軍議の場面が文字で表現している。それは「先生與二帥密議、用間賺其出而後擒之」、すなわち王士琦が西路軍の総大将劉綎と海路軍の総大将陳璘と軍議し、日本の西路軍を殲滅する方策を定めたという内容である。当時、陳璘と西路軍の総大将劉綎は王士琦の監視下にあるため、軍議の際、王士琦は中央に座っている人物である可能性が極めて高い。「東征図」の題録から、「征倭紀功図巻」の軍議図の中央に座っている文官は王士琦であり、彼の両側に立っている両名の武官は劉綎と陳璘であることが推測できる。

また、「東征図」の来歴に関しては、図録の「随綎入、遍視賊壘」という内容に注目すべきである。それはすなわち、王士琦が戦いの後、西路軍の総大将劉綎と一緒に順天の倭城に入城し、倭城のすべての箇所を検視した記録である。「東征図」は恐らく王士琦と一緒に順天城に入城した彼の家臣である従軍絵師の手によるものであろう。

『朝鮮日本図説』

中国国家図書館古籍善本閲覧室に作者不明の明刻本『朝鮮日本図説』（請求番号：11949）２冊が所蔵されている。その中の「日本図説」の部分は、当時の豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争を描いている。万暦年間の蔵書家趙定宇の『趙定宇書目』（明末清初寫本）と明末清初の蔵書家の錢謙益の『絳雲樓書目』（清嘉慶鈔本）は、何れも当該書を著録している。ここから、『朝鮮日本図説』は少なくとも明末に刊行され、更に蔵書家に所蔵されていたことがわかる。

刻本の形となった『朝鮮日本図説』は絵巻の形式の「征倭紀功図巻」や「東征図」とは異なり、木版印刷による印刷書である。この印刷書は、短時間で大量印刷が可能であるが、絵巻に比べその画像は白黒で画質も大幅に低下している。

『朝鮮日本図説』の主な内容は次の三部分に分けられている。①朝鮮図およびその図説（図の説明文）、②秀吉の朝鮮侵略期における朝鮮にある倭寨図（倭城図）およびその図説、③日本図およびその図説。そのうち、秀吉の朝鮮侵略戦争に直接関係するのは、②の倭寨図およびその図説である（以下「倭寨図説」と略

称)。

「倭寨図説」は①「四路倭寨総図」・「倭寨総図説」、②「東路倭寨分図」・「東路釜山寨図説」、③「中路倭寨分図」・「中路泗川寨図説」、④「西路倭寨分図」・「西路順天倭寨図説」、⑤「諸路倭酋水寨全図」・「水路南海倭寨図説」という、5種の図とその図説により構成されている。図は倭城図の空間的配置および築城の様子(曲輪、城門、兵営、天守など)を忠実に写したものである。図説は1597〜1598年の戦役期における倭城の地理的配置、当時の攻防戦の実態、合戦に関する得失の分析などの内容である。

「倭寨総図説」はこの戦争について次のように述べている。

> 壬辰夏、倭奴作難、大肆啓疆、連諸島之衆、屯結釜山、縱兵長驅。鮮人素不習兵革、且無一朝之備、望風瓦解、喪國墮都、君逋臣虜、而三京之地、倭奴奄有之矣。于是陪臣奔朝乞師、詔遣樞臣經略大將徂征。斯時也、倭以驕悍飄忽深入西北、遂成破竹之勢。然營壘則寥寥也。故我兵一戰而下平壤、再進而收開城、復王京。倭奴退守釜巢、假乞封以緩我師。迨封議成、我之備遂弛、而倭益密厲爪牙、儲集益厚、冀夆戈而図席捲。故封使不旋踵、而倭且瀰漫京南數道矣。丁酉秋、攻陷全慶、據有泗川、順天之地、合釜山為東中西三陸寨、南海、閑山二大島為水寨。清正巣釜山、石曼子巣泗川、行長巣順天、平調信巣南海、閑山、因山為墉、因水為隍、堅陴重柵、火彈周施、延亘八百餘里、水陸相望、聲勢連絡、南方形勝、盡為所據、當時説者謂大勢在倭、雖佽飛賁育、恐無所施其力。戊戌秋、王師畢集、先設奇以挫其鋒、随犄角以牽其勢、因糧扼吭、朝鮮之粟不供、日本之餉不繼、賊之外援絶而内日窮蹙。於是水陸夾擊、危巣振籜而下、賊謀合兵海洋一逞、而水師接擊、焚燬帆檣、殲厥渠魁、俘馘醜類、絶卵覆巣、頓清海國。夫倭奴以七年而成狡窟、志不在小、而竟奪于天威。然按其營壘、建設周詳、機巧備至、其素称善守、良不誣也。因図之以俟籌海者覽焉。

作者はこの戦争を、①秀吉が出兵し朝鮮を撃破(1592)→②明が朝鮮に援軍し日本軍が釜山まで撤退(1593)→③外交折衝によって明の万暦帝が豊臣秀吉を「日本国王」に冊封したが、明日交渉は破綻した(1593〜1596)→④日本の2度目の朝鮮侵略と朝鮮南部の占領(1597)→⑤明が再度朝鮮に援軍し日本侵略軍を殲滅(1598)という流れで大雑把にまとめている。また、1597〜1598年の戦役期の日本軍の築城について作者は「因山為墉、因水為隍、堅陴重柵、火彈周施、延亘八百餘里、水陸相望、聲勢連絡、南方形勝、盡為所據、當時説者謂大勢在倭、雖佽飛賁育、恐無所施其力。(中略)建設周詳、機巧備至、其素称善守、良不誣也」と絶賛している。それに続く図説に、「倭

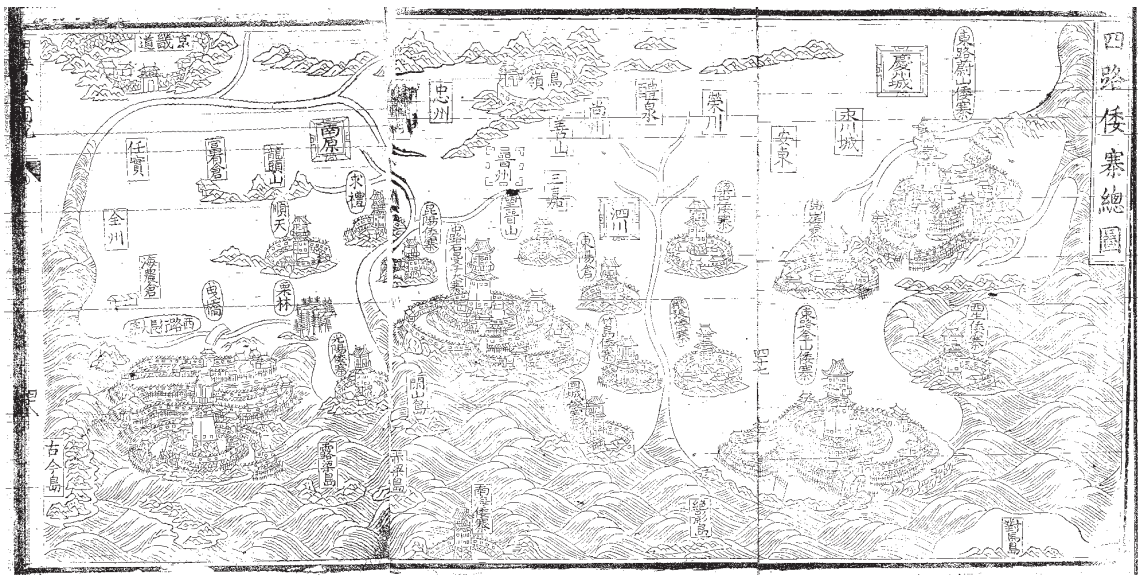

図4　四路倭寨総図(原図は三枚に分かれている。以下同)

塞図説」の刊行の趣旨は「籌海（海上の安全を籌画）」するためにあると指摘している。すなわち、終戦直後の当時、明に対して日本からの脅威はまだ続いていた。作者は戦勝後自ら朝鮮南部の各倭城に入城し詳細に検視していたことを明記しているため、それらの倭城図は恐らく実測によって作られたのであろう。

「四路倭塞総図」に明記される倭城は、①東路蔚山倭塞、②島山倭塞、③西生倭塞、④東路釜山倭塞、⑤梁山倭塞、⑥機張倭塞（以上は東路）、⑦中路石曼子大倭塞、⑧竹島倭塞、⑨固城倭塞、⑩昆陽倭塞（以上は中路）、⑪西路行長大塞、⑫光陽倭塞（以上は西路）、⑬南海倭塞（これは水路）などの13箇所である。

「東路倭塞分図」にみる倭城は、「総図」の①蔚山清正大塞、②島山倭塞、③西生倭塞、④釜山老倭塞、⑤梁山倭塞、⑥機張倭塞などの6箇所以外、⑭本廠倭塞や⑮閑山倭塞が新しく描かれている。⑮閑山倭塞は水路である。本図の倭城は全部で8箇所である。

「中路倭塞分図」にみる倭城は、「総図」の⑦石曼子沈安道大塞（＝中路石曼子大倭塞）、⑧竹島倭塞、⑨固城倭塞、⑩昆陽倭塞などの4箇所以外、⑯金海倭塞、⑰永春倭塞、⑱望晉山倭塞、⑬南海大塞の4箇所が新しく描かれている。そのうちの⑬南海大塞は水路である。本図の倭城は全部で8箇所である。

「西路倭塞分図」にみる倭城は、「総図」の⑪西路行

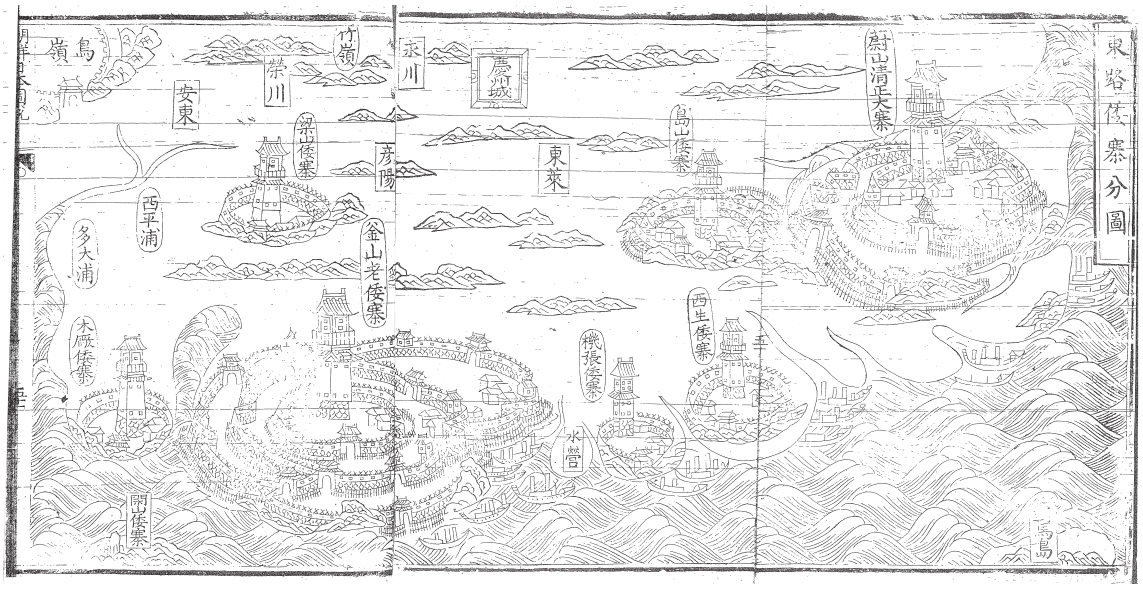

図5　東路倭塞分図

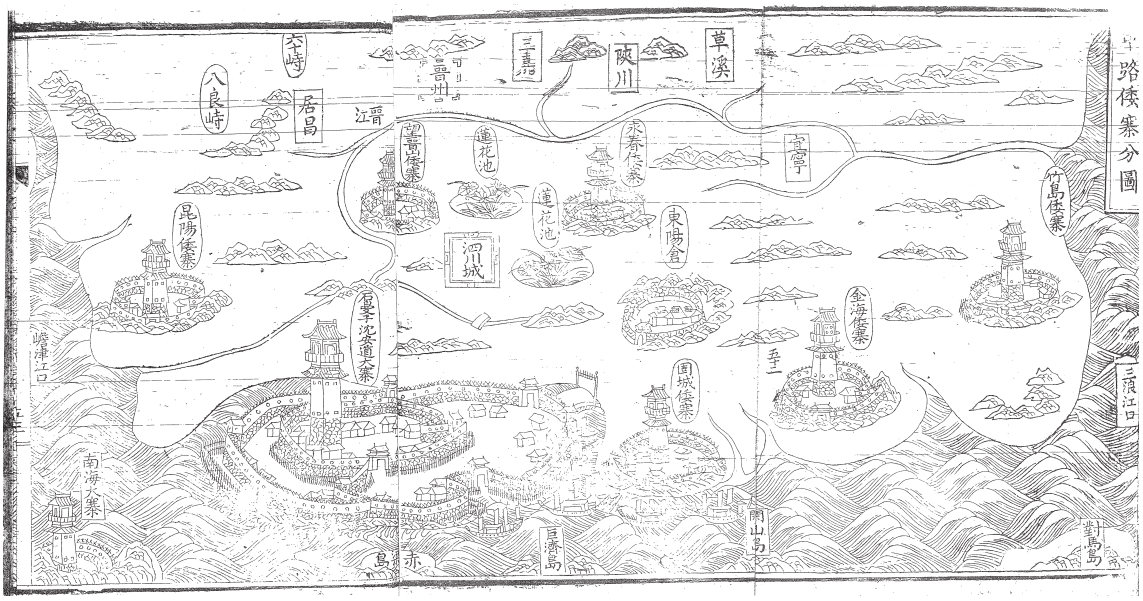

図6　中路倭塞分図

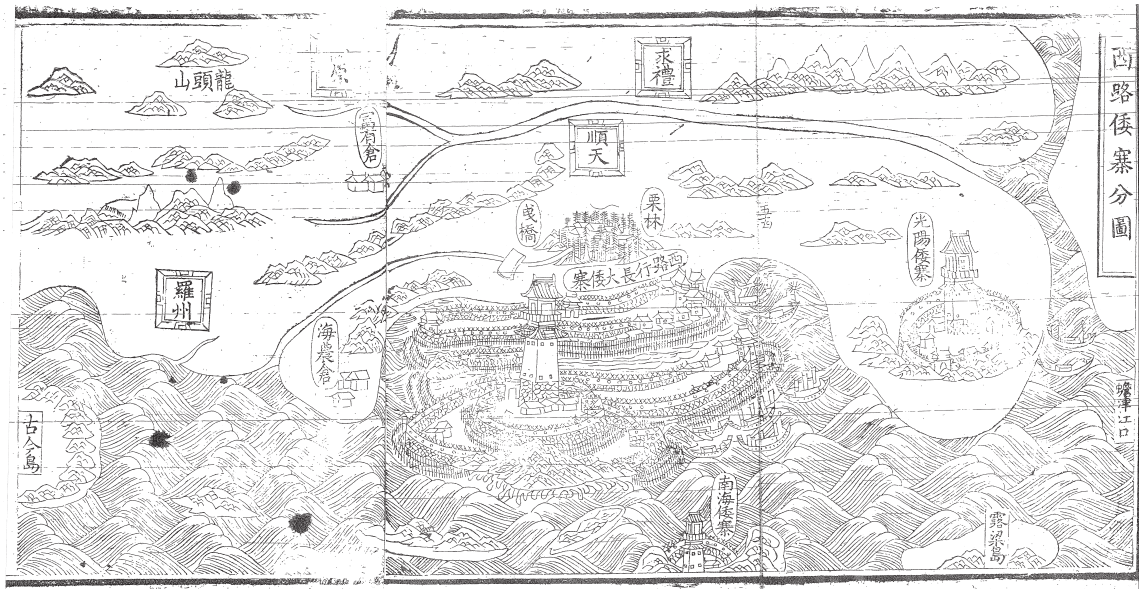

図7　西路倭寨分図

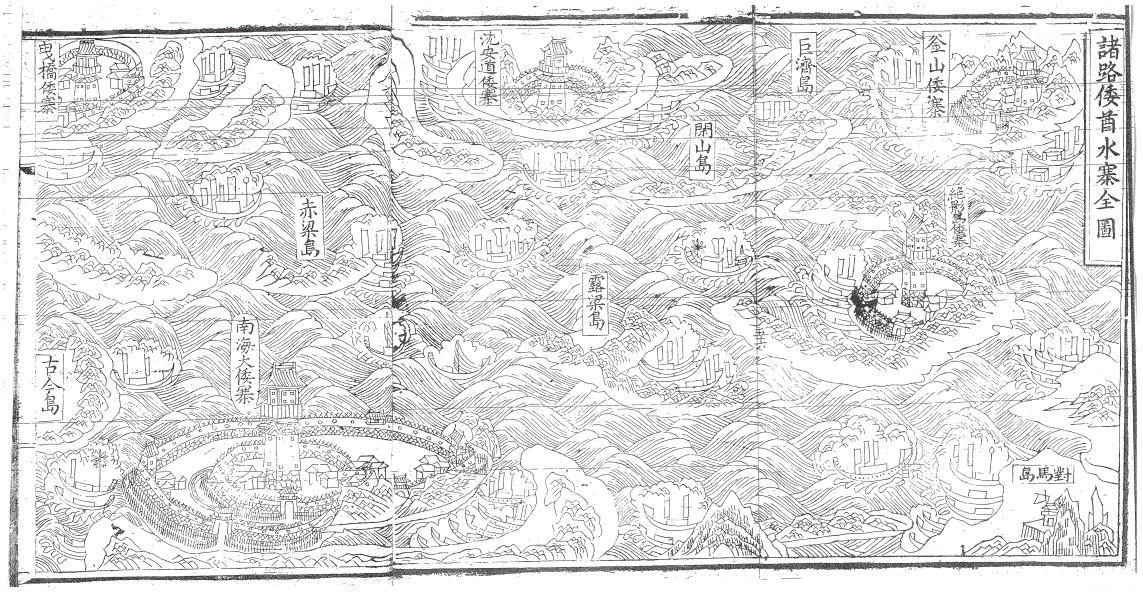

図8　諸路倭酋水寨全図

長大倭寨、⑫光陽倭寨両倭城の以外、水路の倭城⑬南海倭寨も描かれている。

「諸路倭酋水寨全図」にみる倭城は、「総図」⑬南海大倭寨以外、⑲絶影島倭寨と東路の④釜山倭寨、中路の⑦沈安道倭寨、西路の⑳曳橋倭寨（⑪西路行長大倭寨か）も新しく描かれている。本図の倭城は全部で5箇所である。

以上の四路の倭寨分図は、「四路倭寨総図」と局所的な重複を除けば、四路全部で20箇所あることが分かる。これらの倭城図を併せて見れば、当時の日本軍の全体的駐屯の実態は容易に把握できる。

以上の倭城のうち、もっとも複雑に描かれているのは恐らく「西路行長大倭寨」であろう。この倭城図は筆使いが粗末で画質も悪く見えるが、「征倭紀功図巻」のそれと比べれば、築城の空間的配置と曲輪の構成はほぼ一緒である。「征倭紀功図巻」と同じような写実的な図像であることは確実である。また、日本の築城文化に対する知識の欠如が原因であろうか、一つの城でしかない蔚山城は「倭寨図説」で「蔚山清正大寨」と「島山倭寨」と、真二つの城に割れている。「島山倭寨」はおそらく「蔚山清正大寨」の連郭式縄張の本丸であろう。

注

（1） 笠谷和比古「蔚山籠城戦と関ヶ原合戦」（『倭城の研究』第2号：小西行長の順天城、城郭談話会、1999年8月）、高橋修「壬申倭乱に関する絵画――和歌山県立博物館所蔵『壬申倭乱図屏風』を中心に――」（『倭城の研究』第4号：ソウル大「倭城図」と韓国の倭城研究、2000年7月）、三鬼清一郎「蔚山城合戦図をめぐって」（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』所収、2007年12月）などの論考を参照。

（2） 韓国では普通「壬辰征倭図」と呼称されている。「征倭紀功図巻」は最初は元コロンビア大学教授ギャリー・レッドヤード（Gari K.Ledyard）より紹介された。それ以後、この図巻に対して多数の論考がなされてきた。ギャリー・レッドヤード「〈新発見資料〉『壬辰征倭図』の歴史的意義」（『新東亜』1978年12月号、東亜日報社）、黒田慶一「順天城と『征倭紀功図巻』」（『倭城の研究』第2号、1999年8月）、同氏「南海倭城と『征倭紀功図巻』」（『倭城の研究』第4号、2000年7月）、「新発見史料「壬辰征倭図」と慶長の役の新事実」（『歴史読本』第45巻第12号、2000年8月）、陳邦植『陳璘明水軍都督의征倭紀功図再照明』（東邦企劃、2000年）などの論著を参照。

（3） 王士琦が朝鮮の王室と大臣との間の書簡のやり取りは、臨海市博物館の丁伋氏によってすでに紹介された。ところが、「東征図」およびその題録にみる王士琦の朝鮮での活躍は、丁伋氏の研究でまだ言及されていない。丁伋「王士琦抗倭援朝功績考述」（『堆沙集』、中国社会科学出版社、2007年）161～163頁を参照。丁伋氏の論考によると、『章安王氏宗譜』の嘉慶年間（1796～1820）の刻本はまだその一族に所蔵されている。著者が目にしたのは仙居県下各鎮羊棚頭村に所蔵されている最新の修訂本（簡体字本）である。

（4） 陳邦植『陳璘明水軍都督의征倭紀功図再照明』（東邦企劃、2000年）、19頁。